

## 七、初恋

その時わたしは十四歳、彼女は多分十三歳だったろう。わたしは祖父の妾の宋姨太太について杭州の花牌楼に寄寓した。隣に姚という一家が住んでいたが、彼女はその家の娘だった。彼女の本の姓は楊で、清波門のたもとに住んでいて、たぶん排行が三であったために、人はみな彼女を三姑娘と言った。姚家の老夫婦に子どもがなかったので、彼女を義女として一月のうち二十日あまりは彼らの家で過ごした。宋姨太太は少し離れた羊肉屋の石家の嫁とほうまが合ったけれども、姚宅の老婦とは仲が悪く、お互い口もきかなかった。しかし三姑娘はそんなことにはお構いなく、相変わらず扉を開けて遊びに来た。彼女はたいていまず二階に上がって、宋姨太太にお愛想など言って、それから下に降りてきて、わたしと下男の阮升が共用にしている板の机のそばに立って、“<sup>みけ</sup>三花”という大きな猫を抱いて、わたしが陸潤章の木刻の字帖を写すのを見ていた。

わたしは彼女と一言も話したことがないし、また仔細に彼女の顔や姿態を見たこともない。たぶんわたしはそのころ已にひどい近視だったが、他にもう一つ訳があった。無意識に彼女に対してとても親近感を持っていたけれども、一方では彼女のオーラに圧倒されたようで、ちゃんと目を開いて彼女をつくづく見られなかったのである。今思い返して見ると、細い顔立ち、黒い目、痩せて小さい体、しかも小さな足をした少女で、別に特に優れた所はない。だがわたしの性生活の中では要するに初めての人であり、わたしに自分以外に他の人に愛着を感じさせ、はっきりした性の概念のないままに異性への恋慕を引き起こした最初の人である。

わたしはその頃当然“醜い家鴨の子”であることは、自分でもわかっていた。だがついにそれを以てわたしの情熱を消すことはしなかった。彼女が猫を抱いてわたしの習字を見にくるたびに、わたしは思わず頑張って、ふだんはしない努力をして字を書き、一種何も望むところのないぼんやりした喜びを感じていた。けっしてわたしが好きかどうかなど訊かなかったし、まだ自分が彼女を好いていることなど知らなかった。要するに彼女の存在に対して親近と喜びを感じ、そして彼女のために何かしたいと思った。これは当時の偽らぬ心情であり、また彼女がわたしにくれた賜物でもあった。彼女の方でどうだったかはわからない。自分の感情はたぶん淡い恋慕でしかなかったろう。終始男女夫婦の問題など考えたことはない。ある晩、宋姨太太が突然また姚姓への憎悪を發表して、最後に言った。

“阿三というチビも、碌でもない奴だ、いつかどうせ拱辰橋に落ちぶれて娼婦になるだろうよ。”

わたしは娼婦になるということがどんな事なのかよくわからなかったけれど、当時それを聞いて心に思った。

“彼女がもし本当に落ちぶれて娼婦になるなら、きっとぼくが救い出してやる。”

半年ほどの光陰がこのようにして消え去った。七八月になって母が病気になったため、わたしは杭州を発って家に帰った。一月後、阮升が暇をもらって帰って、ついでに我が家に寄り、花牌楼の事を話し、言った。

“楊家の三姑娘がコレラで亡くなった。”

わたしはその時やはりとても不快に思った。彼女の悲惨な死相を想像して。と同時にとても安心したようでもあった、まるで心の中にあった大きな石を下ろしたかのように。

※初出：1922年9月1日『農報副刊』